

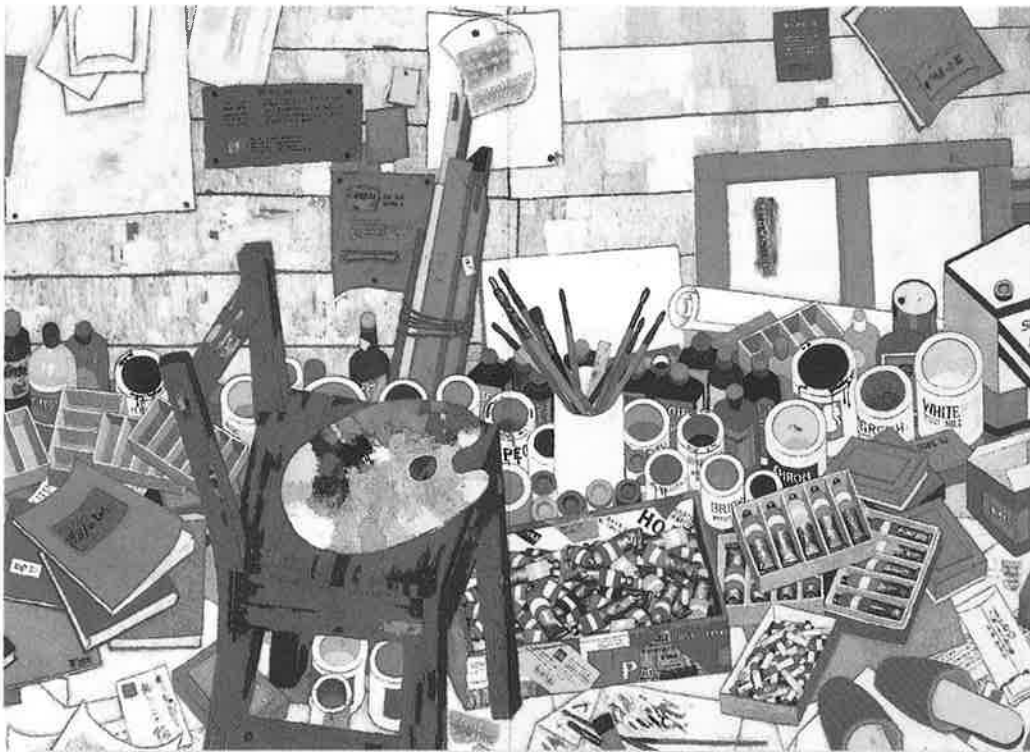


1996.10.31  
No.5

# 記念館だより

神田日勝記念館

〒081-02 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL 01566-6-1555



## 画室 B

一九六六年制作 油彩・板  
一四四・二×一八三・〇  
神田日勝記念館蔵

これまでの克明に質感を抽出する描法から離れ、大きな転換期となった画室の連作。「画室B」は、その中の一作です。

日勝が生涯をかけて追い求めた「リアリズム」は自らの体験に基づいた、生活に密着したモチーフによる表現でした。本来画布を立てて絵を描くアトリエは、何よりも彼と密接な空間であったといえるでしょう。

# 平成八年度後期常設展示

## 特集「馬」

九月二十二日(月)

今年度後半の展示替えは九月三十日に行いました。

前回から、神田日勝を新しい切り口で紹介する「特集」は、馬をモチーフとした作品を取り上げて、初期から絶筆に至るまでを追っています。

次々と画風が変遷するにもかかわらず、随所にモチーフとして登場する馬は日勝のライフワークとなりました。開拓農家として入植して、農業を支える大切な労働力であった馬は、子どもであった日勝にはさらに身近な存在であったことでしょう。毎日見て触れたその体毛を一本一本まで描き出した作品は、四本の足でしっかりと立ち、十分な質感・重量感を持っています。特に、記念館のシンボルマークにもなっている「馬

(絶筆)」の途中で終わっているその姿は、三十二歳で夭折した画家の姿と重なります。

その「馬(絶筆)」とエスキースを中心とし、昨年、寄贈された「風景」「水辺の馬」を含めた十二点の作品群により、彼の画業における馬の存在を振り返ります。

また、半年間の修復を終えた「画室B」を一階に展示し、一九六六年から制作された一連の画室シリーズのうち当館が所蔵するA・B・C、三点を同時に見ることが出来ます。

二階では、日勝最後の完成作となつた「室内風景」の三点のデッサンを公開しています。以前から展示されていた「室内風景」と題されたデッサン二点に、完成作の中央に描かれている人物像の足下に描かれてい

る人形のデッサンを初公開しました。作品中では斜めに横たわっている人形も、デッサンでは背筋が伸びて、まるで自身で立っているようです。鉛筆によって薄く描かれている姿に、一種異様な雰囲気を感じる方も多いようですが、着想から完成へと進めていく、制作過程を想い描くことができるのではないのでしょうか。



### 秋・芸術

神田日勝記念館友の会と共催で毎年開催している「芸術鑑賞バスツアー」。今年は大人・子どもを含めて十八人が参加し、珍しいほどの快晴の中、札幌へと足を運びました。

札幌芸術の森で開催中の「全国クラフト公募展」を鑑賞するツアーでしたが、併せて野外美術館の彫刻を鑑賞することができ、現代の生活に即したクラフトと、豊かな緑の中の彫刻作品とのひとときは、短い時間ながらも「美術」を満喫することができたことでしょう。

参加者の中にも陶芸などの制作を続けている人もおり、この分野への関心の高さをうかがわせました。

### 芸術鑑賞バスツアー

10月13日(日)  
札幌芸術の森



第二回にして全道に規模を拡大した「馬の絵作品展」。募集は七月十六日から夏休みをはさんだ九月十日までの約二か月間でしたが、予想以上の反響で、昨年の四倍を超える一、四〇〇点もの作品が集まりました。学校でのまとまった出品が中心となりましたが、個人単位での出品には、コンピュータグラフィックスによるものや、イラストボードに描いたもの、定型外の大きなものなど、個性的な作品が目立っていました。

また、十月八日から一週間の会期中、応募作品全てを展示したところ、学校単位での観覧や遠く十勝管外から訪れた方々など、多くの人に見てもらったことができました。

十二日の表彰式には、遠く檜山支

庁北檜山町からも出席があり、盛大な式を執り行いました。子どもたちは嬉しそうな、誇らしそうな表情で、少し緊張して、賞状と盾を受け取りました。式終了後には記念館の見学を行い、馬の特集を中心とした展示を熱心に見つめていました。日勝が描いた馬と自分たちの馬を比べてとき、何かに留まるものがあったのではないのでしょうか。



北海道知事賞  
釧路市立鳥取中学校3年 今井可南子

# 第二回馬の絵作品展

募集 七月十六日(火)～九月十日(火)  
 展覧会 十月八日(火)～十月十三日(日)



神田日勝記念館は馬の絵作品展を通して、「描くこと」と「見ること」を一体とし、絵画のすばらしさや楽しさ、そして時に見え隠れする難しさを考える機会になることを祈念しています。

子どもたちの歓声が、またこの場所で開催することを期待し、来年に向け、よりよい作品展となるよう準備を進めていきます。

## 絵画教室

油絵講座  
 10月2・9・16・23日  
 鹿追町民ホール/工作室



今年度最初の絵画教室「油絵講座」が、昨年に引き続き斉藤隆博先生を講師に迎えて開かれました。

十三名の受講者の方々は、初心者から経験者まで様々ですが先生の一人一人への適切な指導により、それぞれ思い思いに一枚の作品を完成させようと制作に取り組みました。

四回行われた講座の後半では、ある程度まで完成に近づいた作品を前に合評会も行われ、互いに作品を評価し合うことで、より一層の絵画制作への意欲と理解を深めました。こうして完成した作品は、町民文化祭作品展に出品し、成果を発表することになりました。

# 展示空間に清冽なハーモニー

## 蕪壑祭

宵闇の中に幻想的に浮かぶ記念館。開館以来北海道電力の協力を得て一週間行われるライトアップの中の六月十七日に開館記念日を祝う「蕪壑祭」が開催されました。

第一部は合唱コンクールで全国的な評価をうける帯広市の女声合唱団「ヴォワ・デ・フルール」による合唱。展示室の階段をステージに見立てて演奏されるミサ曲はドーム状の教会を思わせる展示室の雰囲気溶け込み、「花」、「ラ・ラ・ルー」、「星に願いを」等、透明感あふれるハーモニーが百人の聴衆を魅了しました。



第二部は講演。帯広百年記念館研究員作間勝彦氏が、「日勝を読む」と題して、自身の新聞記者体験に裏打ちされた目で時代人としての神田日勝を語りました。

終了後、会場を町民ホールに移してワインとチーズの交流会。実行委員により入念に準備された様々なワインとチーズが並べられたテーブルを囲んで、演奏者と参加者が一体に

# 美の世界を語る―館長対談 馬耕忌

四年目を迎えた馬耕忌、神田日勝の生涯とその画業を顕彰するつどいも、本年は日勝没後二十七回忌の年



なって芸術談議の花を咲かせました。



にあたり、八月二十五日の命日と重なる意義深い日に開催されました。

第一部は献花と黙とう。壇上に掲げられた遺影に、ギターの調べが奏でられるなか、ファンが次々に登壇しました。続いて都甲雅子さんの散文朗読と田中光俊さんのギター演奏の合同公演。散文は画家の二十七回忌にちなみ、ミサ子夫人の『私の神田日勝』から抜粋しました。都甲さんは記念すべき年のために日程を調整して友情参加、多くのジョイント

コンサートを経験している田中さんの競演が場内を魅了しました。  
第二部は「馬耕忌」の命名者で信濃デッサン館主窪島誠一郎氏と高橋記念館長という個性的な美術館の代表者による「館長対談」。日勝と風土を語り、その絵の魅力を紹介。さらに同時期開催の「戦没画学生作品展」のことから戦争画論など、談論風発、二つの知性の討論が聴衆を感動の世界に誘いました。

第三部は記念館前庭芝生でのジーンギスカンパーティ。遠く高崎市からの参加者を含め、ファンの交流の輪を広げました。





**戦没画学生作品展**

8月25日～9月3日

画家を志しながら応召され、戦病没した青年たちの作品展。「無言館」建設に向けた移動展で、道内では岩内に巡回。



**岡沼秀雄展「時」**

9月20日～25日

神田日勝の画友の作品展。代表的な油彩画とコンピューターペイントによる作品を併せて展示。



**多彩な展覧会事業**

会場・鹿追町民ホール

平成八年度も展覧会事業実行委員会の主催により、多彩な展覧会が開催され、多くの絵画ファンを魅了しました。



**北5人展&北彩4人展**

4月27日～5月7日

独立展・全道展に出品し、東京銀座の画廊でグループ展を開催する北海道在住画家の合同移動展。



**伊藤恵美子個展**

8月13日～18日

鹿追町での少女時代を追想したパステル画による郷里では初の作品展。



**賢治祭参加**

九月二十日～二十一日

馬耕忌の充実のために実施されている先進地視察、本年は花巻市の賢治祭（宮沢賢治を偲ぶ集い）に河辺哲子・伊藤朝子さんが参加しました。



**入館者二十万人達成**  
神田日勝記念館の入館者が、九月十六日二十万人に達しました。二十万人目となったのは、東村山市在住の高波広行さん。札幌の友人と四人で釧路から帰途に訪れたものです。文屋助役より記念品が贈られました。

**ちよつと INFORMATION**

**事業予定**

- 1月
  - ・子ども絵画教室
  - ・子ども芸術鑑賞バスツアー
- 2月
  - ・絵画教室
  - ・斉藤隆博個展
  - ・美術講座
  - ・企画展「神田日勝と十勝の美術」

このテレカには日勝の自筆サインも印刷されています。なお、数量限定で記念館窓口で販売しています。



**「開拓の馬」がテレカに**

神田日勝の二十七回忌のためにミサ子夫人が「開拓の馬」のテレホンカードを作成しました。この作品は、夫人の父が北鹿追神社の絵馬として日勝に描かせたもので、現在は記念館に展示されています。